

大和し美し

佐藤一英

# 大和し美し

大和は國のまばろばたなづく青垣山隠れる大和し美し

倭建命

黄金葉こがねばの香りに散りて沼に落つれば、跳とぶくにつれ下底ぞこの泥どろその身を裏うらみ離はなつなし……  
われもまた罪業重くまとひたる身にしあれば、いかでか死をば通とおれ得む  
されどわれ故郷ふるさとの土に朽ちざる悲しさよ

あゝ陽ひはいまや大和やまとなる山の紅葉もみぢを耀かまやかし

昔むかしわが遊びし野邊や河岸かみせに子供らの影ゆらめかす思ひあり……

かしこには一人の男おとこの子、他の子らを制せいして草叢くさむらを分け、鶉うらうすの巢すにぞ近づきたれ  
その手にはおのが上衣うへぎを脱ぎてかゝぐ

またかしこには竹の弓もて柿の實を狙へる子あり、百舌鳥ももぢ射損じての戯れか、額汗ぬくみばむ  
ほど遠からぬ杉の木のきの根元に母は幼児に乳房やりつゝこのさまを頬笑みて看る  
子供らよ、さきく育てよ、母の背の杉にまさりて  
されどいましら獵うまにいでん齡としとなりて

猪いのししの牙を折るとも兄弟あなごの頭かしらを拉ひぐことなかれ

ここにその兄をば弑ころし咎とがめにて父には離れとつくに骸むくさらさむ人の子あり

あゝされど何をか告げむ、世は一瞬にして目覺めざむれば罪ある身なり

昨日きのう伊吹いぶきは紅葉もみぢして空を染めたり

今日見ればかの大いなる猪いのししのごとく白し

われ足萎あしなへてイみしとき、農夫は稻刈るをいそぎむたりき

いま彼等は榎えだ柵さく火びをめぐり新らしき飯いひほほばらむ

たゞわれは苦き汁を啜すすればよし……

ああ美夜受みやう、汝なが参らせし酒の香ぞこの汁にこもれる心地す  
しかれども藥を毒と變ずるは汝なが柔かきかひなにあらず

なれはかの夜、無知なる百合花の咎もなく拵ぎて匂ひ惱ませり

腹太き蜂そのうちに飽くなき情慾を横へ眠りき

汝の髪に顔を埋め、われ父を弑しまつらむ夢にふけりぬ

いづれか罪の深からむ、母となる人を盗みしわが兄と

われ自らの夢にふるへおののきし

さるにわれいましてが甘き息のもと、再び酔に落ちしこそわが過なれ

汝はいまもわれを待つらむ、あゝ美夜受、われ待ちがてに襲の欄にまたも月のたゝむとき

契りて置きしわが劔かひなにかかむ

かくてなれわが肉身を得ざるにぞ、まことの愛を學ぶべし……

あゝ歸らざる昨日をなげき一昨日のなげきぞ新らし

鎧まとへる若者ひとり山坂の岩角に立ち、誇らかに來し方遙かにふりかへる、そは昨日のわれなり

征矢飛び來つてわが楯に中ると見れば燕なり、身を翻へしわが肩を掠めて去りぬ

世は眞夏、野はかぎりなき海にも似たり

住家みな輝やく波におほはれて人なきごとし、まことの營みは恒にかくあり、そを知らざりしこそわが愚なれ

われは感じぬ、なき妻のいまはの歌の一節ぞ勝利の鼓に優れるを

あゝ橋、思ひぞいづれ、かの日空は暗澹として雲落ちこむ景色なり

淵さながらの空を劃りて涯もなく葦は穂を並む

われら道もなきそのなかをひたすら進みき

なれの頬そここに血を滲ますに

われ氣づかへば、なれ何事か不吉なるものを感じしごとく

——道速振神の住むてふ大沼はいづれにあらむ、その氣もあらず、怪しあやし

かく言ひも終らぬうちに鷺群をなし葦原を飛び立ち去りぬ

時もあらせす一條の煙昇れり

——かしこにも、なれの指さす方既に一團の焔はあがる、そはわれらを謀りて焼き殺さむとする賊の仕業なり  
けり

げに愛するものは明智こそ得るなれ

わがをばより賜りし袋を開けむことをすゝめしもなれなりき

げに愛するものは勇氣こそ得るなれ

わが劔もて葦を薙ぎゆくしるよりそを掻き集め、かの袋にありし火打ちもて火を放ちしもなれなりき  
賊向ひ火にあふられて逃げ散りしうち、われ焼跡の灰にまみれし櫛を見いでてなれに示せば、なれ莞爾として  
亂れたる髪を束ねぬ

圖らざりきその笑顔いまもなほ見るがごときに、その櫛のみこたひは濱の白砂に半埋るを見いでむとは  
われは濕りてやゝ黒ずみしその櫛を手に受けしまゝ茫然たりき  
かくもわれとは縁深く、なれの肉身の一部かと思はれしその櫛に、あはれなれの髪の香さへかぐを得で藻草の  
香のみ蔽はむとは

亡ぶには七日を待たず、されどそはまだよし  
愛うすくして罪深からむ輩には亡ぶるに速き忘れあり

なれ失ひし悲しみも渡の神の牲となり浪にのまれし東の間ぞ

風、海の底より起り、波、空を行く折しもあれ、忽然と波間に消えしなれの顔、その白き幻も瞬におりし鳩に  
はあらで、明日また浮びはいでじ

さるにあはれわがころにはたゞ黒き血に燃え猛る鷲の翼ぞ擴ごりたり  
やがてそは性をのみて跡をも見ざるかの暗き走水の浪にもまして翔け去りぬ……

あゝ父の愛喪ひてなほ愛を信じぬたりし幼き頃ぞなつかしき

望みも果てし暗き築地のわが胸にふとも香る梅の花、そはわがをば倭の御衣裳に移りし肌の香ぞ

あゝ倭われかつてお身の胸に抱かるる思ひに酔ひてお身の御衣裳に鎧せり

わが身裏に溢れし力はわれのものならで、母のごとく温かきお身の愛にてありしなり

さるにわれわが力に優る熊曾建を討ちてより、お身の御衣裳をわが妹の肌をたのしむ夫の心に感じ始めぬ

呪ひやいかで免れむ、神に仕ふる處女子の血をも穢さむ夢みしものに

われふるさとを幾山河雪雲深きとづくに死なむといふもことほりなれ

あゝ倭、お身の名を再び呼べばわが目にはふるさとの空晴れ渡り、山々は肌も露はに現はるる

そはわが子いかに見悪くからむも、そをはぐまむころには人目もあらず胸をはだける母をさながら光浴び  
たり

カヲキヨ  
ニル

昭和八年九月二十五日印刷 昭和八年十月  
一日發行 東京市豊島區長崎町一ノ二  
八〇八詩歌研究所佐藤一英著作 東京市  
世田谷區松原町三ノ一二〇新詩論編  
編輯吉田一穂發行 東京市豊島區門前仲  
町一ノ二三水達社小澤正太郎印刷 50 錢

